「『大きな古時計』の街、千里山 」プロジェクト案

―――― この歌詞が生まれてちょうど５０周年になります ――――

国民的にも広く親しまれた童謡で、また2002年に平井堅さんによりカバーされ大ヒットした『大きな古時計』は、実は千里山とは大きな縁があります。原曲はアメリカ人ヘンリー・クレイ・ワークさんの作詞・作曲ですが、訳詞したのが千里山出身の保富庚午さんでした。また平井堅さんのカバーではサウンド・プロデューサーとして同じく千里山出身の亀田誠治さんが参加されました。『大きな古時計』を千里山の街を象徴する歌として提案します!

■ 主　旨

・訳詞の持つ世界観や雰囲気のベースには、保富さんが育った当時の千里山の街や住まい、その文化や佇まいが反映されています。
・訳詞の内容に込められているメッセージには、これから千里山の街づくりに大切なテーマとできるものが多くあります。

↓

・世代を超えて愛される『大きな古時計』を街を象徴する歌として位置づけることにより、ひいては街づくりのビジョンや教育そして多様な街の活性化に繋げられます。

■ テーマ

『大きな古時計』のメッセージと街づくりの理念。

・保富さんが『大きな古時計』を訳詞するにあたり、心に描いていたであろう想い出深い故郷千里山、その街や家室そして生活を想像します。

古時計の似合う和洋折衷の家室　　周囲の田園風景と親和し噴水や街路樹のある落ち着いた街並み　　東京・大坂の融合した生活文化
英智と愛情に満ちた家族像　　自治会組織により纏まりのある自立・交流的な住民精神

・保富さんの訳詞(別紙)に込められているメッセージを読み解き、千里山の街づくりにとって指針となる理念や価値観を考察します。

百年休まずに動く おじいさんと一緒に動く 子供の誕生を祝う 幸せな結婚・家族 嬉しいことも悲しいことも分かち合う 皆に見守られて別れの時が来る	➡	家族や世代間の繋がりその温かさ 生まれてから死ぬまで勤勉に動く 一緒に喜び、悲しみも分かち合う 生命(モノにも)大切に愛情を注ぐ	➡	勤勉で共に思いやり、生命を大切に愛深く生きる

■ ビジョン

『大きな古時計』を活性化のビジョンに展開。

1

・交差点や駅ホームのチャイムや現在工事中の駅前広場にモニュメントなど、景観の中に形(音)として住民に知って貰えるように企画します。
・旧小学校正門などが残るちさと図書館などで、保富庚午さんの『大きな古時計』展を顕彰・開催し、住民の人達に広く知って貰います。
・またその後に、ちさと図書館や新たに建設される駅前コミュニティーセンターなどに記念展示コーナーなどを設けます。
・保富さんの生誕の地に表示標のようなものを設置し、縁りの道路(小学校正門までの通り)に「古時計通り」などの愛称を考えます。etc.

2

・幼稚園や小学校などの音楽教育の中で先輩の『大きな古時計』を教え、自分たちが生まれた街の歴史や文化に愛着と誇りを持って貰います。
・中学校で英語原詞と比較しながら詩作の授業をしたり、ECCやスミスなどの英語塾でもカリキュラムに採り入れることなども提案します。
・街の合唱や関大アカペラのグループなどにレパートリーとして歌って貰い、「『大きな古時計』の街、千里山 」を協力して広めていきます。
・音楽スクールやピアノ教室などでも『大きな古時計』をテーマにカリキュラムが企画できます(例えば『大きな古時計』をウクレレで!)。
・合唱やアカペラ、またアコースティック感をメインテーマとした音楽祭(新たな童謡も公募)を開かれた実行委員会方式で企画します。etc.

3

・カフェやレストランなどでインテリアとして『大きな古時計』的な演出を提案します。
・飲食メニューや名物(土産や雑貨)などを始めとして、『大きな古時計』に因んだ商品を開発し商・産業の活性化に繋げて貰います。
・将来はアンティークや手作り感のある家具や雑貨ショップも誘致し、魅力あるイメージで集合する商業エリアとしてもアピールします。etc.

■訳詞・保富庚午(　1962年)

(1) 大きなのっぽの古時計　おじいさんの時計
　百年いつも動いていた　ご自慢の時計さ
　おじいさんの生まれた朝に　買ってきた時計さ
　今はもう動かない　その時計
　百年休まずに　チクタクチクタク
　おじいさんと一緒に　チクタクチクタク
　今はもう動かない　その時計

》
(2) 何でも知ってる古時計　おじいさんの時計
　綺麗な花嫁やってきた　その日も動いてた
　嬉しいことも悲しいことも　みな知ってる時計さ
　今はもう動かない　その時計
　百年休まずに　チクタクチクタク
　おじいさんと一緒に　チクタクチクタク
　今はもう動かない　その時計
》

(3) 真夜中にベルが鳴った　おじいさんの時計
　お別れの時が来たのを　皆に教えたのさ
　天国に昇るおじいさん　時計ともお別れ
　今はもう動かない　その時計
百年休まずに　チクタクチクタク
おじいさんと一緒に　チクタクチクタク
今はもう動かない　その時計

産経新聞 (2002年)

「あのとき主人はピアノでメロディーを奏で、大声で歌いながら訳詞を作っていました。《原詞を忠実に訳し、それをきれいにメロディーに乗せなくては》と、苦心していたようでした」

夫を失って以来、東京・西麻布のマンションで一人暮らしを続けている妻のみさおさんは、いとおしそうに当時の様子を話す。

「それで、一カ所だけ原詞と明らかに違う個所ができたんですよ。原詞の《So it stood ninety years on the floor》を《百年いつも動いていた》と訳したんです。九十年ではメロディーに乗せにくいでしょう」（笑い）

「主人は数え切れないほどの歌を書きましたが、その中でもこの歌は特別です。平井さんの歌がヒットする前も、《障害を持つ息子がこの歌を聴いて励まされています》とか、《新人研修でこの歌を使いたい》といった電話が時々かかってくるんですよ。主人をしくした私の生きる励みになった歌でもあるんです」

■訳詞・ヘンリー・クレイ・ワーク(　1876年): 日本語対意訳

(1)
My grandfather's clock was too large for the shelf,
So it stood ninety years on the floor.
It was taller by half than the old man himself,
Though it weighed not a pennyweight more.

おじいさんの時計は棚に置くには大きすぎたので
９０年もの間、床に置かれていたんだ
おじいさんの背丈より半分以上も大きかったけど
重さは（おじいさんの体重と）１グラム程も違わなかった

It was bought on the morn of the day that he was born,
And was always his treasure and pride.
But it stopp'd short, never to go again
When the old man died.

その時計はおじいさんが生まれた日の朝に買ってきたものなんだ
いつもおじいさんの宝物であり、誇りだったんだ
でも急に止まって、もう動かなくなってしまった
おじいさんの亡くなったその時に

＜CHORUS＞
Ninety years without slumbering, tick, tick, tick, tick,
His life seconds numbering, tick, tick, tick, tick,
But it stopp'd short, never to go again
When the old man died.

＜コーラス＞
９０年間も休まずに　チク、タク、チク、タク
おじいさんの人生の一秒一秒を刻むように　チク、タク、チク、タク
でも急に止まって、もう動かなくなってしまった
おじいさんの亡くなったその時に

(2)
In watching its pendulum swing to and fro,
Many hours had he spent as a boy.
And in childhood and manhood the clock seemed to know
And to share both his grief and his joy.

時計の振り子が前へ後ろへ揺れるのを見ていながら
おじいさんは少年時代の多くの時間を過ごしてきた
その時計は知っていたんだ　おじいさんの子供の頃も青年の頃も
そしておじいさんの悲しみや喜びさえも

For it struck twenty-four when he entered at the door
With a blooming and beautiful bride.
But it stopp'd short, never to go again
When the old man died.

おじいさんが美しい花嫁と一緒に部屋に入ってきたときは、
時計は鐘を２４回鳴らして祝福したのさ
でも急に止まって、もう動かなくなってしまった
おじいさんの亡くなったその時に

(3)
My grandfather said that of those he could hire,
Not a servant so faithful he found.
For it wasted no time, and had but one desire.
At the close of each week to be wound.

おじいさんが言ってた　彼が雇った者の中で
時計ほど忠実な召使いはいないと
時間を無駄にせず　望みといえばただひとつ
週に一回ネジを巻いてもらうことだけ

And it kept in its place, not a frown upon its face,
And its hands never hung by its side.
But it stopp'd short, never to go again
When the old man died.

自分の居場所にとどまって　いやな顔一つしないんだ
両手をだらしなくぶらさげることもない
でも急に止まって、もう動かなくなってしまった
おじいさんの亡くなったその時に

(4)
It rang an alarm in the dead of the night,
An alarm that for years had been dumb.
And we knew that his spirit was pluming for flight,
That his hour of departure has come.

時計が突然真夜中にチャイムを鳴らした
何年もの間鳴っていなかったのに
僕たちは分かっていたよ　おじいさんの魂が天へ昇っていった事を
おじいさんの旅立ちの時か来た事を

Still the clock kept the time, with a soft and muffled chime,
As we silently stood by his side.
But it stopp'd short, never to go again
When the old man died.

時計は柔らかくやさしい音色のチャイムと共に時を刻み続けていたよ
僕たちがおじいさんのそばに立っているときも
でも急に止まって、もう動かなくなってしまった
おじいさんの亡くなったその時に

読売新聞 (2002年)

子供好きな保富には子供がいなかった。「次代の子供たちはきっと苦労が多いと思う。つらい時、アニメソングの一節を思い出して慰められたりするもんだよ」と言っていたという。ピアノなどの楽器演奏も得意だった彼はまた、作詞の際は「メロディーにうまく乗る日本語」を何よりも大切にした。

『大きな古時計』の訳詞が原詞と違うことには十分な必然性があった、と言えまいか。